

県内構成資産



大砲の砲身をつくるための金属溶解反射炉 旧集成館 反射炉跡

西洋の書物と在来の技術により自力で建設された、大砲の砲身をつくる施設。炉内部の天井や、壁に炎と熱を反射させて鉄を溶かすため反射炉と呼ばれました。反射炉の建設は製煉所で小型のひな型をつくり、鉄の溶解実験からスタート。実験は難航しましたが、斉彬は「西欧人もなり、佐賀人もなり、薩摩人もまた人なり(西欧人や佐賀人にできた反射炉製造が薩摩人にできないわけではない)」と藩士らを励まします。1852年に磯で建設された1号炉の建設は失敗に終わりました。2号炉が1857年に完成すると、鉄製砲製造にも成功しました。ただし、2号炉も薩英戦争で破壊されたため、現存するのは2号反射炉の基礎部分のみです。



集成館事業の動力!水の取水施設 関吉の疎水溝

関吉の疎水溝は、江戸初期に農業用水のために建設。そして1722年、島津吉貴が仙巖園へ水を供給するために磯地区まで延長します。その後、集成館では高炉や鑛開台の動力源として水車を必要としましたが、磯地区には大きな川がないため、島津斉彬は関吉の疎水溝の改修や整備を実施。取水口では川幅の狭い場所を利用し、江戸の土木技術により水位をかさ上げして水路に水を引き込みました。現地には今も当時の職人が岩盤を加工した痕跡などが残っています。現在の取水口は、幕末の取水口が大正時代の大洪水で流されたため上流部に移設したものです。



集成館事業のための白炭をつくった炭窯 寺山炭窯跡

集成館事業で使用する白炭を増産するために建設した寺山炭窯の跡。島津斉彬は山元藤助を紀州(和歌山)に派遣して炭焼法を学ばせ、木炭の材料となるシイやカシが豊富な寺山の山中に炭窯を築きました。石炭を産出しなかった薩摩藩において、炭窯は斜面を造成して凝灰岩を積み上げて建設されました。その大きさは国内最大級で、火力の強い白炭は、集成館で高炉や反射炉、薩摩切子製造の燃料として使用。1858年に建てられた炭窯の碑には、斉彬に仕えた国学者で歌人でもある八田知紀によって、2基の炭窯が完成し3基目が建設中である状況や、斉彬が「大きな木だけを伐れ」と命じた旨が彫り込まれています。



現存する日本最古の西洋式機械工場 旧集成館機械工場

洋式船や蒸気機関の修理、部品製造を行った集成館の機械工場。この石造りの建物の責任者である技術者・竹下清右衛門は、長崎製鉄所などの西洋式の建物を参考に工場を建設。そのため屋根を支える小屋組が不完全で、和小屋のような太い梁や石壁の基礎部が神社建築によく見られる亀腹石であるなど、日本人だけの力で苦勞してつくった様子がうかがえる建物になっています。工場内にはオランダやイギリスから輸入された最新式の機械を設置。現在は博物館(尚古集成館)として島津家や集成館事業の歴史を学ぶことができます。



鹿児島紡績所の指導者イギリス人技師たちの宿舎 旧鹿児島紡績所技師館(異人館)

日本で最初期の木造西洋建築。西欧人たちがアジアなどの植民地によく建設したコロニアル洋式の建物で、外見は洋風ですが、屋根裏の小屋組が和小屋で、日本の寸法で設計された柱が用いられていることなどから、イギリス人の指示に基づき、日本人の大工が建てたと考えられています。イギリス人技師は3年契約で来日しましたが、予定より早く約1年で帰国。これは戊辰戦争がはじまったことや、薩摩の職工たちがすでに水車館で機械による作業を経験していたこと、また紡績所で働く人々が武士層であったこと等から技術を短期間で習得できたためといわれています。建物は、世界文化遺産や技師館の歴史を伝えるガイダンス施設として利用されています。



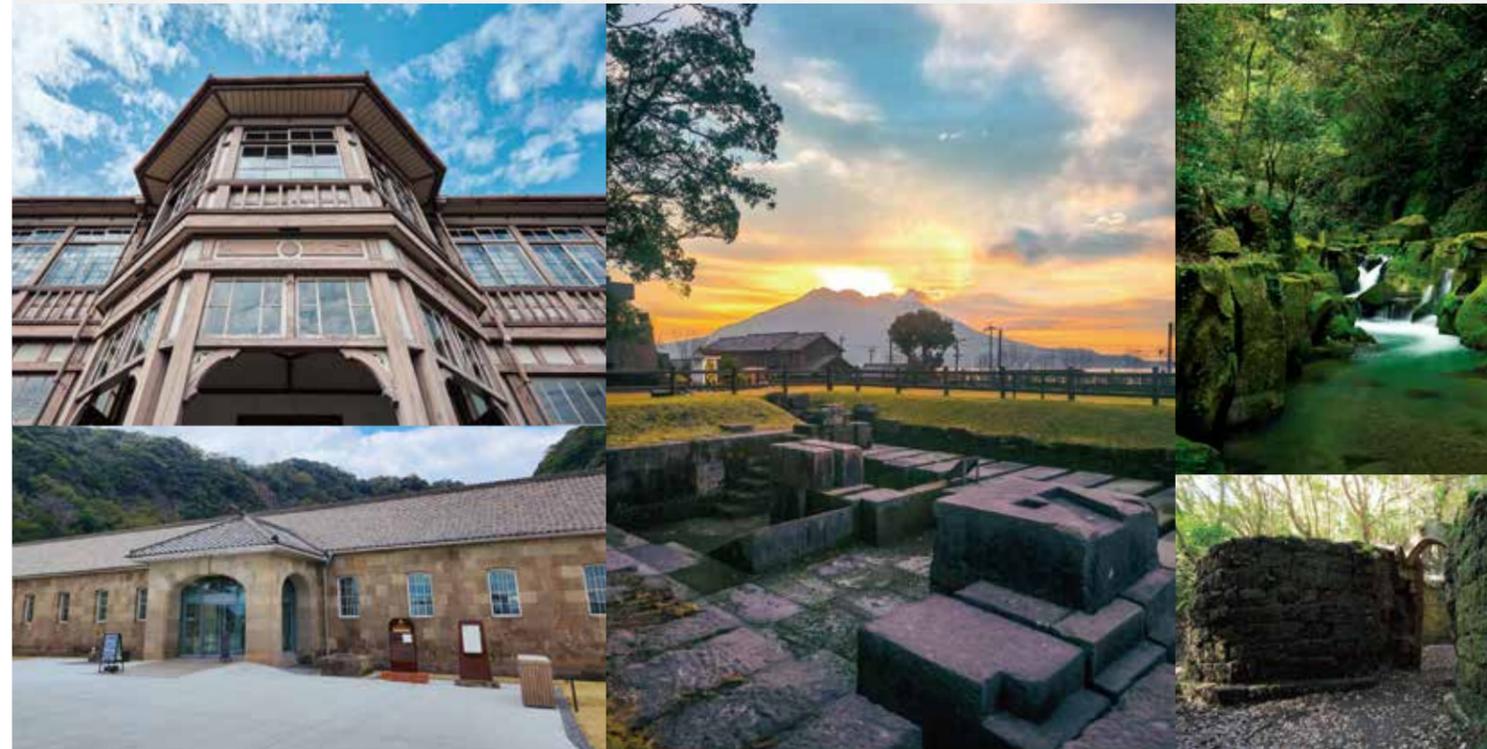
鹿児島県
世界文化遺産室
公式Instagram



SEKAI_BUNKA_ISAN_KAGOSHIMA

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」 登録10周年記念シンポジウム

～その価値・意義の見つめ直しと次世代への継承～



目的

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」は、本年7月に登録10周年の節目を迎えることから、「『明治日本の産業革命遺産』～その価値・意義の見つめ直しと次世代への継承～」をテーマに記念シンポジウムを開催し、日本の近代化、重工業の先駆けとなった本遺産の価値・意義を改めて見つめ直し、次世代への継承を図ります。

2025.7.12(土) 13:00 ▶ 16:30

鹿児島県歴史・美術センター 黎明館 2F 講堂

第一部 記念トーク

13:00 記念トーク 出演者 佐藤 青南 氏 | 東川 隆太郎 氏

第二部 記念シンポジウム

14:00 挨拶

14:15 基調講演 「世界文化遺産登録を振り返って」 島津 公保 氏
「世界文化遺産登録10年の意義とこれから」 原口 泉 氏

15:30 パネルディスカッション

「日本の近代化、重工業の先駆け」
～その価値・意義の見つめ直しと次世代への継承～

コーディネーター 東川 隆太郎 氏

パネリスト 島津 公保 氏 | 原口 泉 氏 | 深港 恭子 氏

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」

「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は2015年7月に世界文化遺産に登録され、2025年に10周年を迎えました。明治以降の日本の近代化において重要な役割を果たした産業遺産群であり、19世紀後半から20世紀初頭に向け、わずか50年余りの短期間で産業化を成し遂げた、世界でも類を見ないプロセスを物語るものです。全国8県11市に分布する23の構成資産全体で世界遺産の価値を有しています。

第二部 記念シンポジウム

基調講演
パネルディスカッション
パネリスト

島津 公保 氏
一般財団法人
産業遺産国民会議 理事



1950年生まれ。東京都出身。慶應義塾大学大学院修士課程修了。1989年島津興業入社後、薩摩切子の販売、製造の責任者を経て、島津興業の副社長、社長に就任し、島津の歴史を守り、活かした観光事業を推進すると共に、鹿児島県の歴史・文化価値の向上に努める。1999年から集成館事業の再評価としての「薩摩ルネッサンス事業」を推進。「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産登録実現に尽力した。現在は、文化立県鹿児島を目指して様々な活動中。

- 島津興業 元代表取締役社長(2001～2007年)
- 南九州クリーンエネルギー株式会社 代表取締役社長(2003年～)

第二部 記念シンポジウム

基調講演
パネルディスカッション
パネリスト

原口 泉 氏
志学館大学
人間関係学部 教授



1947年 鹿児島県生まれ。東京大学文学部国史学科卒。同大学大学院修士課程修了、博士課程単位取得。鹿児島県立図書館長、鹿児島県歴史・美術センター黎明館顧問などを歴任。鹿児島大学法文学部教授を経て、2025年7月現在、同大学名誉教授、志学館大学教授。専門は日本近世・近代史、薩摩藩の歴史。大河ドラマ「翔ぶが如く」「琉球の風」「篤姫」「西郷どん」などの時代考証を担当。近著「薩摩藩と明治維新」(志学館大学出版会)、『近代日本を拓いた薩摩の20傑』(燦燦舎)など

第一部

記念トーク

佐藤 青南 氏
小説家



1975年 長崎県生まれ。「ある少女にまつわる殺人の告白」で第9回「このミステリーがすごい!」大賞優秀賞を受賞し、2011年同作でデビュー。ドラマ化された「行動心理捜査官・楯岡絵麻」シリーズ、「白バイガール」シリーズ、「絶対音感刑事・鳴海桜子」シリーズ、「お電話かわりました名探偵です」シリーズ、「ストラングラー」シリーズ、『犬を盗む』、『一億円の犬』など、著作多数。「明治日本の産業革命遺産」世界遺産協議会が令和4～6年度に実施したプロモーション事業にて、「関吉の疎水溝」をテーマとした短編ミステリー小説「幽霊はどこへ行く」を執筆。

第一部

記念トーク

第二部
記念シンポジウム

パネルディスカッション
コーディネーター

東川 隆太郎 氏
NPO法人
かごしま探検の会 代表理事



鹿児島県内の歴史や地理の視点を中心に普段見慣れている景色の中に地域資源を見出す「まち歩き」活動を行い、「世間遺産」や「僕立公園」に認定し楽しむほか、ガイドや講演活動を通じて発信。鹿児島県内の歴史や地理を機軸に、考現学・産業遺産・温泉・廃線・微地形など様々なテーマで自ら案内人として地域を語る。鹿児島の歴史・地理・民俗などがとにかく大好きで、のんびりそれらを調査して鹿児島の魅力発信に従事している。

- 鹿児島県観光アドバイザー
- 2007年～ 特定非営利活動法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事(2001-2007年まで専務理事)
- 志学館大学非常勤講師(地域教育論)2009～
- 「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 2024～

第二部

記念シンポジウム

パネルディスカッション
パネリスト

深港 恭子 氏
鹿児島県歴史・美術センター
黎明館 主任学芸専門員



1969年、垂水市生まれ。西南学院大学国際文化学科ヨーロッパ文化専攻卒、1993年から鹿児島県歴史資料センター黎明館資料調査編集員。2003年、指宿白水館美術館建設準備室学芸員となる。2008年2月より、薩摩伝承館学芸員、2016年6月より、鹿児島県歴史資料センター黎明館主任学芸専門員美術・工芸(薩摩焼)担当となり、現在に至る。2018年、明治維新150周年記念黎明館企画特別展「華麗なる薩摩焼一万国博覧会の時代のきらめき」、2022年、黎明館企画特別展「茶の湯と薩摩」を担当。2024年、第12回小山富士夫記念賞奨励賞受賞。日本陶磁史、薩摩焼並びに明治期の輸出陶磁器を中心に研究。